かるむし

75

麻生区文化協会会報

麻生区の風物紹介「寺子屋活動」

寺子屋は、地域ぐるみで子どもたちの学習や体験をサポートする仕組みです。子どもたちに豊かな学びや体験の機会を提供することにより、学ぶ意欲の向上や豊かな人間性の形成に役立つような活動を、シニア世代をはじめとする地域の方の知識と経験を活かして行っています。

核家族化が進む現代社会においては、大人同士の関係さえ希薄になっていますので、意識的に多世代が交流する場を作っていくことが必要です。地域の大人と子どもたちが出会い、大人同士もつながる場であり、世代を超えた人と人のつながりを強めることも寺子屋活動の目的の一つです。

寺子屋活動は、川崎市の事業として２０１４年にスタートしました。全市で89の寺子屋が立ち上がっており、麻生区内では小・中学校24校のうち、12校で活動しています（２０２３年度末現在）。私が所属する寺子屋では、毎週水曜日の放課後1時間を学習支援として、8人の寺子屋先生が子どもたちの宿題を見たり、一緒にゲームをしたりしています。先生は元教員や地域住民などで構成されています。また、体験活動は毎月約1回のペースで土曜日に2時間実施しています。講師は基本的に区内の方々にお願いしています。

昨年から体験活動の一つとして「稲作」をシリーズで行っています。田植えに始まり、秋の稲刈りや脱穀を体験し、その藁で正月飾りを作ります。そして活動のまとめとして、収穫したもち米で、餅つきをしています。稲作体験を通して、子どもたちが「ふる里」を感じることができればと思い、活動を続けたいと考えています。

（文／井上 俊夫、絵／佐藤 勝昭）

からむし第75号のラインナップをご紹介します

P1 麻生区の風物紹介
地域ぐるみで子どもたちの体験をサポートする「寺子屋活動」に取り組んでいる本会役員の**井上俊夫**さんが、稲作の体験活動を紹介します。

P2 あさお芸術・文化のまちに向けて
本年4月の総会で新たに会長に選出された**板橋洋一**さんが、これからの取り組みについて抱負を語ります。

P3 芸術・文化に親しむ生活 42年を振り返って
「あさお音楽のまちコンサート」を主宰する**丸山博子**さんが、このコンサートを始めた時のいきさつとその意味合いを紹介するとともに、芸術・文化が市民生活に果たしている役割を熱く語ります。

P4～5 会員の活躍、各部・団体の活動紹介
会員の笠原秋水さん、志村幸男さんのご活躍、および麻生区文化協会の4つの部と2つの団体の活動を紹介します。

P6～7 麻生区文化協会の活動報告
4月に開催された定期総会、7月から8月に開催された夏休み親子教室、アカデミー部が、なつはづきさんをお招きして9月に行った「俳句講座」、6月に美術工芸部が行った「民藝の女優さんを描くデッサン会」について報告します。

P8 川崎市市制１００周年記念式典演奏会に参加して
7月にミューザかわさきシンフォニーホールで開催された式典について、**横須賀朝子**さんが紹介します。

追悼「菅野明さんに感謝を込めて」
4月に亡くなった元副会長・菅野明さんの追悼文を**菅原敬子**前会長が寄稿しました。

文化協会のこれから
麻生区文化祭、あさお古風七草粥の会、アルテリッカ新ゆり美術展など。

編集後記

あさお芸術・文化のまちに向けて

麻生区文化協会会長　板橋　洋一

板橋洋一会長

今年4月21日の総会で、新たに会長の任に選出されました。これまで十余年にわたり、麻生区文化協会を力強くリードしていただいた菅原敬子前会長をはじめ退任された役員のみなさまには、今後とも温かいご指導を賜りますようお願いいたします。また、会員の皆さまには、引き続き当会の運営についてご協力いただくことを心よりお願いいたします。

後継者・担い手不足が課題

文化協会に限らず、今さまざまな会や組織に共通するのは後継者不足、担い手を若手へのバトンタッチができないという課題です。先日も報道されましたように、出生率が1・2となり新生児も73万人足らずという少子社会になりました。団塊の世代といわれ文化協会の中心メンバーとしてご活躍されている方々が生まれたのはピーク時で290万人ともいわれていますので、4分の1の数になってしまいました。

目標の持ち方を変える必要も

青空教室、二部制など、学校の教室が足らなくて授業をするのにも困難であった時代は、過去の幻影のようです。八掛け社会といわれるように、全体的に縮小していく社会にあって、これまでの成長一辺倒であった目標の持ち方を変える必要があるのかもしれません。企業経営であれば外国への移転もしくは外国人労働者の受け入れで対応できますが、地域での文化活動を主とする私たちの活動は小さくなっていく社会の中で、歴史や文化の大切さを守っていくとともに、新たな文化や多様性をどのように受け入れていくかが問われているものと思われます。

高齢化の中で高まる文化活動の重要性

そして、高齢化です。戦後が終わったといわれた1955年時点の平均寿命は60余歳でしたので、今では20年以上長寿命化しています。また健康年齢も延びていますので、老いてますます盛んといわれるのも当たり前になっています。昨年、幸いなことに麻生区は長寿日本一の称号ももらいました。長く培ってきた文化活動を通じた仲間づくりと、地域の豊かさへの還元という文化協会の担う役割は変わるものではありません。結びつきが希薄になってきたといわれる地域社会であればこそ、ますますその重要性が高まってきているものと思われます。

時代の大きな変化の中で

時代は大きく変わったようです。気候変動、多発する地震、そして戦争。悲観的な要素もまた人々の不安をもたらせています。さらにITやAIの発達など人智を越えた情報機器が幅を利かせ、人のぬくもりが伝わりにくくなってきた時代にあって、まさに人間的な営みである文化・芸術への造詣が大切にされるべきなのでしょう。

翻って、麻生区は昨年区制40周年を迎え、いろいろな行事が古くからの歴史を振り返る作業を踏まえて行われました。その行事を通じて、地域文化が多くの先人によって築かれてきたことがあらためて認識されたものとなりました。そして、今年は麻生区文化協会が設立されて40周年にあたります。温故知新。地域の歴史や伝統をしっかり守りながら、時代の推移や課題に対応した新たな文化活動への引き継ぎを図る年になっていくことを意識していきたいと思います。とはいえ文化活動は短兵急に変わるものではありませんので、継続しながら変わっていくことの楽しみを感じて、息長く進めていけるようにと考えています。

文化・芸術が人を豊かにする まちづくりを

話は変わりますが、麻生区の中心である新百合ヶ丘駅は、横浜市営地下鉄3号線の延伸も決まり、故中島豪一さんの言葉を借りれば、「第三のまちびらき」ともいえる開発が計画されています。日本のいたるところで効率優先の再開発が進められ、どこも個性が乏しく同じような駅前、街並みの風景に変わっていますが、新百合ヶ丘はまだ40年の浅い歴史しかありませんので、当初のまちびらきが求めた「緑豊かな快適な環境、文化・芸術が人や地域を豊かにするまちづくり麻生区」の玄関にふさわしい花を咲かし続けていきたいものです。

文化・芸術活動を通して 人の輪・地域の輪をつなぐ

個人的に肝に銘じてきた言葉に、「Think globally, Act locally」があります。広い視野をもちながら身近に実践していく、そして「うれしさは分かち合えば倍数になる。悲しみは分かち合えば分数になる」ことを心掛けてきました。

文化・芸術活動によってつながっていく麻生区のすばらしい魅力を、微力ながらこれからも支えていけるように努力いたします。重ねて、これまでと変わらず会員の皆さま、麻生区の市民の皆さまからのご協力を賜りますようお願いいたします。

芸術・文化に親しむ生活 42年を振り返って
～数々の奇跡が起きた過去から未来へ～

丸山 博子

朝、ベランダ側の窓を開けると、太陽の光が飛び込んできます。光は木々の葉っぱを輝かせ、優しい風と一緒に空に向かって舞っています。その時々でいろいろな顔を見せてくれるこの自然。自然は芸術そのもの。深呼吸するとオーケストラの音色に包まれた感じがするときもあり、不思議です。時々、空気はおいしい香りを漂わせることもあり、空気を吸っておなかいっぱいになることもあります。やっぱり不思議です。

区役所に4つの提案を提出

東京品川区から麻生区に緑と芸術・文化の薫りを求めて引っ越してきました。3人の子どもの子育てに忙殺される中、心が癒され明るくなれるまちになればと、友人と思い付いた案を麻生区役所に提出しました。すると奇跡が起き、私たちの思い付きと区のイメージアップ事業がマッチしたのです。提案は「麻生区役所ロビーで音楽を！」「麻生区で気楽に聴ける音楽を！」「どんな人も、誰でも一緒に楽しめる音楽を！」「ジャンルを超えて融合する新しい芸術・文化を発信！」の4つ。対応した区の職員さんは心が広く頭の柔らかい方でした。「盛りだくさんだなぁ」と目をまん丸くされ、「こんなことができるかなぁ？」と大笑いされましたが、「チャレンジしよう！ やってみよう！」と前向きなお言葉をいただきました。提案に興味を持ってくださったおかげでこの思い付きは実現することになったのです。

あさおランチタイムコンサートがスタート

２０００年11月、ついに麻生区役所ロビーに音楽が響き、「あさおランチタイムコンサート」が誕生。麻生区在住やゆかりのある演奏家たちが次々に登場して演奏を披露しました。始まった当初はまだ生活の中に「音楽」が溶け込むには至っていませんでしたが、徐々に「音楽」という言葉が麻生区で聞かれるようになっていきました。

「あさおランチタイムコンサート」は成長し、「あさお芸術のまちコンサート実行委員会」が主催する「あさお芸術のまちコンサート」へ。地域の人々と音楽で交流することを目指して、区内の学校・福祉施設・病院・大学など、さまざまな場所でコンサートを開始しました。それと同時に、垣根を取り払い多様な人々が交流するコンサートも本格的に行うように。川崎市80周年記念事業で誕生した「えいぶるコンサート」の趣旨を、あさお芸術のまちコンサート実行委員会が引き継ぎ、「ユニヴァーサル」という名称に変えて開催することになりました。また、同委員会は麻生区を飛び出し、地域と地域を音楽でつなぐ役目も担いました。

麻生区地域課題対応事業へ

「あさお芸術のまちコンサート実行委員会」は市民の自主性を強めるため、「あさお芸術のまちコンサート推進委員会」という名称に変更。麻生区の地域課題対応事業として区と共に、市民と共に、多様な人々と共に「芸術・文化」に親しみ、楽しむ事業に発展していきました。かわさきパラムーブメントの理念を形にした催事に成長し、副題に「～For You～」をつけ、現在の活動に至っています。「あさお芸術のまちコンサート」は次の4つの違う色を持った事業です。

①多様な人が活躍し芸術・文化のジャンルを超えた融合の舞台音楽と多文化の融合、障がいの垣根を取り払い人と人がフラットな交流をする、まさに川崎市が目指す「多様性」「いろいろ」を音楽で表現する催事が今も受け継がれています。

②大人も子どもひとつになって歌う市民公募の合唱団、それを支える読売日本交響楽団と麻生区にゆかりの深いプロの演奏家で結成した室内オーケストラの演奏が麻生市民館で開催されていますが、この催事も市民に親しまれています。

③音楽の演奏に特化した舞台。

④他団体とコラボしながら音楽を頼む舞台。

個人活動では「ぴよぴよランド」を展開

個人的な活動として、近年は「音楽工房座MARU」を結成して活動しています。幼児を含む親子でリズム遊びや手遊び歌、あるときは手話、親子で音楽を奏で、紙芝居もする「ぴよぴよランド」を展開。福祉施設を訪問して外に出られない方々と安らぎのひとときを一緒に味わう講座や、誰でも参加できる誤嚥防止と健康維持を目的にした歌の会、麻生区文化協会の夏休み親子教室では手話を取り入れた歌唱とダンス、ＳＤＧｓを学びながら手作り楽器を創作する講座を開催しています。

芸術・文化は人と人をつなぎ、新しい出会いと新しい世界を生み出します。人々の心に生きる力を与え、人々の目に輝きを放ち、人々の思考に発想のヒントを投げかけてくれます。川崎市市制１００周年の歴史を振り返って、先人の思いを胸に小さな歴史のひとつとして「音楽工房座MARU」の活動をゆっくりと、おだやかに続けていこうと思います

会員の活躍

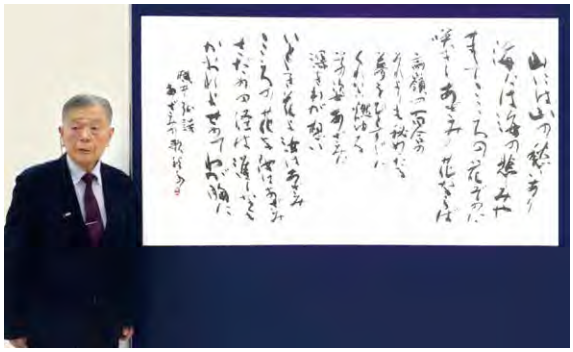
笠原秋水さん、凌雲書展で文部科学大臣賞受賞

「古典に学び個性ある書の美を拓く」を基本理念に活動している凌雲社の第67回凌雲書展（7月31日～8月4日 県民ホールギャラリー）において、本会専門委員の笠原秋水さんが「あざみの歌」詩文書で文部科学大臣賞を受賞されました。受賞おめでとうございます。

「あざみの歌」は、昭和24年、戦後初めて歌われた、精根尽き果てた日本人の心にささやかな希望のあかりを灯したもので、戦後に生きた自分の母子家庭を歌に重ねられました。野の花が大好きで、ご自宅の庭は季節の草花でいつもあふれています。「今後は、日本人の心を映し出す、詩情あふれる作品を手掛け、映像化していきたい」と述べておられます。

伝統的な中国から伝わった日本の書、現代の人間性を表出した書、どちらも日本書道の文化になるように願って書作に挑み続けておられます。

（木村 幾月）



文部科学大臣賞を受賞された笠原秋水さんと受賞作品

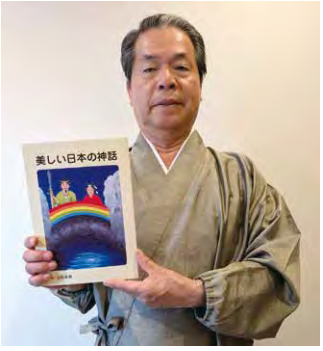
志村幸男さん、絵本「美しい日本の神話」を出版

本会美術工芸部所属で、琴平神社宮司の志村幸男さんが、このほど絵本「美しい日本の神話」を出版されました。

古事記の上巻「国生み」「天岩戸」「八岐の大蛇」を53枚の絵にまとめ、「美しい日本の神話」として油絵で色彩豊かに表現したものです。文章は、古事記研究家の宮崎みどりさんが執筆されました。志村さんは「古来より日本に伝わる神話を子どもたちや海外の人にも知ってもらいたい。親子で親しんでいただければ幸いです」と述べておられます。

この絵本は、七五三などの記念品として配布予定ですが、社務所の窓口でも販売するとのことです。

（佐藤 勝昭）



出版した絵本を手にする志村幸男さん

各部の活動紹介

麻生区文化協会には、文化サロン・アカデミー・美術工芸・舞台芸能の4つの部があります。その活動状況が会員には見えにくいというご意見を受けて各部の活動を簡単に紹介します。

◆文化サロン部

文化サロン部では、講演会の企画・運営を主な活動としています。年度初めに年間テーマと講演内容について話し合いを重ねます。候補を出し、麻生に関連すること、時勢をとらえた話題を中心にテーマを決めています。

コロナがはやり始め、不安な日々を過ごしていた時には「新型コロナウイルスの特徴とその対策」というテーマで、川崎市健康安全究所所長の岡部信彦先生に、コロナの特徴や国のコロナ対策について講演いただきました。

また、麻生区40周年に向けては「麻生区の地名を探る」をテーマに、日本地名研究所の菊地恒雄先生に、区内にあるさまざまな地名のいわれや歴史について講演いただきました。

「小田急線の今、昔、未来」という講演では、放送大学教授の原武史先生を講師にお迎えし、小田急線はどこへ向かおうとしているのかをお話しいただきました。

また、「川崎市誕生物語『百年への贈り物』」を語るというテーマでは、同市民劇の作劇者・小川信夫先生の劇にまつわるお話を聞くことができました。

昨年はこのほかに、専門委員として活躍された千坂隆男先生が、「自由民権運動と麻生」というテーマで講演会を開きました。

現在文化サロン部は主に5人の会員で活動していますが、これからは若い方にも会場に足を運んでもらい、部員になっていただけることを願っています。

（冨田 宏子）

◆アカデミー部

アカデミーと言う言葉には高尚な学びの感覚があります。発足当初にはきっと新生麻生区の文化全般についての学びの拠点にしようという意識があったのでしょうが、現在は俳句講座と文化祭の俳句大会の企画立案と運営が主な活動となっています。

戦後各俳句結社の句会を基盤として発展してきた俳句文芸ですが、全国的に俳句愛好者の高齢化、そしてコロナ禍の時代を経て、変革期に差しかかっており、俳句の盛んな土地柄を誇りとしてきた麻生区も同じ傾向にあり、部の方向性も問われている状況にあります。

俳句講座は回数を減らしても内容的に質が高く、参加者が元気をもらえるような企画を心掛けています。

俳句大会は、回を重ね今年で36回となります。大会案内の作成から発送・配布・応募句の募集・整理・選者への選句依頼・集計・句集作成など大会当日までの3カ月あまり気が抜けぬ事務作業が必要ですが、久しぶりに若い部員の方にも入ってもらい頼もしく、充実した楽しい俳句大会が迎えられるよう取り組んでいます。

（横川 博行）

◆美術工芸部

美術工芸部には、絵画・版画・切り絵・絵手紙・書・工芸・彫刻・いけ花など多くのジャンルがあります。

年間の活動としては、毎年6月に開催する「舞台衣装の女優さんを描くデッサン会」（P7参照）、麻生区文化祭の一演目として10月～11月に市民ギャラリーで開催する「美術工芸展」、また、団体会員である麻生区美術家協会と共に3月に開催する「アルテリッ

カ新ゆり美術展」があります。このほか、川崎市総合文化団体連絡会（総文連）が毎年2月にアートガーデンかわさきで開催する「市民芸術祭美術部門展」の運営に参画するとともに、絵画・書・手工芸・写真の分野に作品を展示しています。

（佐藤 勝昭）

◆舞台芸能部

舞台芸能部には、大きく分けて邦舞邦楽・吟舞吟詠・洋楽・洋舞の4ジャンルがあります。

邦舞邦楽の市民館ホール公演は、文化祭のトップを飾る華やかなイベントです。また、「夏休み親子教室」では、日本舞踊・お琴・和太鼓などの教室を開いています。このほか、あさお区民まつりのパレードなど区の行事に協力しています。

吟舞吟詠は、文化祭において5団体が市民館大会議室で吟詠大会を開催しています。

洋楽の中心は、市民館ホールで行われる麻生フィルハーモニー管弦楽団の演奏会です。毎年外部から指揮者を招き、クラシックの名曲を演奏しています。また、洋楽のメンバーが「夏休み親子教室」で手作り楽器指導を行うほか、麻生音楽祭などの区の行事に貢献しています。

洋舞は、「あさお洋舞ぐるーぷ」に所属する9団体による洋舞公演が、市民館ホールで文化祭のフィナーレを飾っています。「夏休み親子教室」では「夏だ！ダンスだ!!楽しく踊ろう」など、キャッチーなタイトルで子どもたちを魅了しています。

舞台芸能部は、川崎市総合文化団体連絡会（総文連）が毎年3月にカルッツかわさきで開催する「かわさき市民芸術祭」舞台部門の公演に、邦舞邦楽・洋舞が交互に協力しており、他区からも高く評価されています。

団体の活動紹介

◆麻生いけばな協会

「麻生いけばな協会」は1984年に発足し、麻生区近隣に住む6流派（池坊、小原流、紫雲華、草月流、美風池坊）の師範が、麻生区役所や川崎市アートセンターなどにいけ花を展示しています。また、文化協会の活動として、「夏休み親子教室」「麻生区文化祭」「アルテリッカ新ゆり美術展」に参加しています。

夏休み親子教室「世界で一つの花」

「夏休み親子教室」はいつも人気でたくさんの申し込みがあり、指導や花材の準備などを数人の先生方が協力して行っています。親子教室の目的は子どもたちに自然に触れてもらい、花をいける楽しさ、作品を作る楽しさを学んでもらうことです。私たちは流派毎にいけ方や様式などの違いがありますが、みんなで「麻生いけばな流」を考えました。麻生いけばな流が生まれて14年、指導の先生も1年に一度、親子教室の時に麻生いけばな流でいけ花を行います。親子教室では、子どもたちも「簡単だった」と言って楽しそうに花をいけていました。「真剣にお花に取り組めた」「初めていけ花ができて楽しかった」などの感想も聞き、うれしく思っています。

「アルテリッカ新ゆり美術展」では6流派の合同で、約3メートル×7メートルのスペースに一つの作品を出展します。今年は6流派19人で昨年の開催時に展示された陶芸作品に花をいけるなど、分野の垣根を越えたコラボで出展し、来場者を感動させる素晴らしい作品が出来上がりました。これは流派を超えて皆で協力し、互いに向上することを大切にしているからだと思います。

（長澤 紫順）

◆あさお洋舞ぐるーぷ

「あさお洋舞ぐるーぷ」は文化協会の団体会員として地域の文化と芸術活動の発展と共に歩んできました。地域で活動する団体が集まり、踊りを通じて交流を深める場として存在しています。

この団体は1985年に麻生区文化協会舞台芸能部の洋舞スタジオで結成され、2009年に名称をあさお洋舞ぐるーぷと改めました。この団体の代表任期は1年、文化祭の実行委員長が兼務します。現在では9つの団体が所属し、麻生区文化祭で毎年多彩な舞台を創っています。

麻生区文化祭の洋舞の舞台は優雅なクラシックバレエ、エネルギッシュなモダンバレエ、ビートに合わせたジャズダンス、現代的で自由な動きが広げられるコンテンポラリーなど、多様なダンスが織りなされています。それぞれのスタイルが大きな一つの渦を生み出し、踊りの力を再認識させてくれる舞台になっています。毎年多くのお客様にお越しいただき、開場前には長蛇の列ができるほどの動員数を誇ります。このような観客動員を活かして、これからも地域の文化振興に貢献したいと考えています。そのほか、親子教室や毎年の七草粥の会に参加し、地域とのつながりを大切にしながら活動しています。隔年参加の「かわさき市民芸術祭」では、麻生区の作品として私自身いくつかの作品の中の振り付け等をする機会をいただきました。

2024年芸術祭「花園」

麻生区文化協会とあさお洋舞ぐるーぷの歴史は、地域の芸術に対する長きにわたる情熱の証のように思います。伝統と革新が交わる踊りという文化は、多様性を尊重する価値観を育むことができると思っています。これからも多くの方々と共に、踊りの楽しさや美しさを伝えながら、さらなる発展を目指していきたいと思います。

（武石 光嗣）

麻生区文化協会の活動報告

2024年度 総会報告

2024年度総会が4月29日、区役所4階の第1会議室で開催されました。

菅原前会長の挨拶に続き表彰式があり、川崎市文化祭奨励賞が木村幾子、芳賀優子の2名に岸麻生副区長より授与され、麻生区文化振興賞が伊藤雨胡桃、関森田鶴子、横須賀朝子の3名に菅原前会長より授与されました。

引き続き、岸麻生副区長、土屋麻生市民館長の挨拶がありました。

この後議事に移り、佐藤百合子議長のもと進行しました。

報告事項では、総務から2023年度事業報告があり、次いで会計から2023年度決算報告・2023年度特別会計報告があり、監事より監査報告が行われ、拍手で承認されました。

審議事項では、総務から2024年度事業計画案が、会計から2024年度予算案が提案され、審議の結果いずれも承認されました。

次いで、役員選考委員会を代表して、丸山博子委員長が2024～2025年度新役員を左記の通り発表しました。

会　長　板橋洋一
副会長　伊藤胡桃、横川博行
会　計　小田島寛、木村幾子
総　務　井上俊夫、佐藤勝昭
監　事　橋本周、原秀幸

これを受けて、板橋洋一新会長から、新役員を代表して挨拶がありました。

この後、今回で役員を辞める菅原前会長、山室前副会長、橋本前総務に花束の贈呈がありました。

伊藤副会長より花束を贈呈
（左から）橋本前総務、菅原前会長、山室前副会長

（佐藤 勝昭）

夏休み親子教室

麻生区文化協会の主要事業のひとつとして二十数年が経ち、教室内容は和洋舞・科学・ITなど幅広く実施して、時流に応じて変化してきました。今年の「夏休み親子教室」は7月26日から8月11日までの間、11教室を開催しました。応募者は約200人でしたが、内容や定員の関係で、抽選をさせていただいた教室もありました。参加した子どもたちは、暑さにも負けず一生懸命に取り組んでいたのが、印象に残りました。昨年に引き続き、活動を紹介します。

◆子どものための和太鼓教室
（担当講師　菅原 陽子）

酷暑のなか、10人の子どもたちが参加して和太鼓に挑戦しました。会場の修廣寺は、早朝から広い本堂のエアコンを作動させて準備してくださり、快適な環境で教室が開催できました。講座は、「地域の昔と太鼓」「人との繋がり」などの話があり、休憩を取りながら基本打ち、二度打ちなどのリズムに挑戦しました。最後は、保護者を前に覚えたての夏蒐太鼓のオリジナル曲を熱演し教室を閉じました。

教室中、7人の夏蒐太鼓メンバーの皆様による細やかな指導をいただきましたこと、感謝します。

保護者を前に熱演

◆手話と手作り楽器
（担当講師　丸山 博子）

SDGsを学びながら、家庭にある物、捨てる物を利用して楽器を作りました。講師から、手作り楽器の見本と楽器の種類の説明、音の鳴らし方、音色の変化などの実演がありました。子どもたちは、持参した牛乳パックやボタンなどを使って思い思いの楽器を創りました。一人ずつ前に出て、楽器の製作意図や工夫したところなどを発表しました。打楽器、こする楽器、振る楽器など趣向を凝らしたアイデア多数あり、子どもたちの想像力の豊かさに驚かされました。休憩をはさみ、最後に手話を学びました。みんなで手話を使ってハッピーバースデーを歌いました。とても明るく、笑顔がいっぱいで楽しい教室でした。

◆お箏をひいてみよう
（担当講師　谷川 みゆき）

日本の伝統文化に興味を持ち、お箏を体験する教室に、子ども10人、保護者7人が参加しました。お箏の歴史、楽器についての説明。弾き方の基礎体験、「さくらさくら」の演奏練習を行い、最後に合奏しました。体験は、子どもたちメインではありましたが、保護者も同様にお箏を弾き、名実ともに「親子教室」になりました。和室での長時間の正座や爪をつけての演奏体験でしたが、「楽しかった！」との感想を多くいただきました。

親子でお箏を体験

（井上 俊夫）

令和6年度 俳句講座

9月10日、麻生市民館大会議室にて「令和6年度俳句講座」を開催しました。講師に、なつはづきさん（現代俳句協会理事・研修部長）をお迎えし、「AI俳句と俳句のこれから」をテーマにお話しいただきました。

今や世を挙げてAI（人工知能）の時代に突入してきた感があります。俳句文芸においても例外ではなく、俳句総合誌や新聞の文芸欄において、AIとの句会を開いたというような特集が組まれるようになりました。自らの作句に呻吟している私たち多くの熟年高齢世代にとって、AI俳句なるものがどのような意味を持つのか学ぶことも良いかと、若手俳人として活躍中のなつはづきさんに講師を依頼したところ、「経験している範囲内のことでよろしければ」とお引き受けいただき、今回の講座開催となりました。

講師を務めた なつはづき さん

講演においては、

①AIとは何か？

②Google Gemini（無料ソフト）などに「俳句を作ってください」と指示して作られたものは、ほとんど俳句になっていない。

③俳句に特化したAI「一茶くん」（北大・調和系工学研究室）の解説と作句例＝こちらは相当なレベルでの俳句もでき、俳句への共感能力も持ち始めている。1分間に2万句作句するとか。

④結論として、私たちの作句、選句、共感などはすごいレベルのことをしているのです。AIに凌駕されることは無いと思って、安心して楽しく句作に取り組みましょう。

講座への事前申し込み者はAI俳句そのものに興味を持った人が多く、当日受付の参加者には、7月のNHK俳句講座兼題「母」の句会で最高得点になったなつさんの句「へび苺母をまっすぐ見られぬ日」に惹かれて、こんな句を作る俳人の話を聞いて、句境を広げたいと来られた方が多いように見受けました。

なつさん持ち前の明るさで、NHK俳句収録の舞台裏のお話なども楽しく聞かせていただきました。質疑においてもAIに限らず、俳句の作り方や、暑い夏が延々と続き俳句の季語は今後どうなるのかなど、多方面からの質問があり、残暑まことに厳しい中ではありましたが、活気のある講座を無事に終えることができました。参加者は55人でした。

（文／横川 博行、写真／小田島 寛）

民藝の女優さんを描くデッサン会

オープニング

6月15日、大会議室にて麻生区文化協会主催による恒例の「民藝の女優さんを描くデッサン会」が開催されました。文化協会が地域の劇団民藝と共に歩み、今年40回目を迎えた伝統のイベントです。参加者は26人。モデルは劇団民藝の森田咲子さん、石川桃さんのお二人です。実際に民藝の舞台劇で着用してきた衣装を身に着けて登場され、会場の雰囲気が高まります。

モデルの紹介の後、大会議室の左右に設置した台に上がり、立ちポーズや椅子に座ったポーズなどを決めます。その間に参加者は自分で描きやすい好みの位置に移動して描く準備を進めます。

途中休憩を入れながらの前半の60分が始まります。一気に会場の雰囲気が高まり、じっとモデルを見つめる人や、さらさらとラフな線でモデルの大づかみな動きを描き進める人など、皆真剣な表情です。また制作中、希望者は美術家協会員による丁寧なアドバイスを受けることができます。ポーズの動きや光と影のとらえ方等のアドバイスに熱心に耳を傾けながら表現に生かしていました。

後半も、それぞれポーズを変えて60分、参加者の表現意欲はますます高まり、それに応えるように、モデルさんも眩しい照明を受けながらポーズをとり、まさに真剣勝負の2時間が過ぎていきました。

40回の歴史が語るように、デッサンを愛する常連さんも多く、顔見知りの参加者同士で意見交換をする場面も見られました。中には自分の作品をモデルさんに見せてサインを頼む人などもいて、和やかな雰囲気のうちに終了しました。

なお、希望者はここで描いた作品を、来年3月の「アルテリッカ新ゆり美術展」のデッサン部門に出品することができます。

（小田島 寛）

川崎市市制100周年記念式典演奏会に参加して

令和6年は川崎市市制100周年。ということで、7月1日にミューザ川崎シンフォニーホールで記念式典が行われ、麻生区文化協会も「市政功労賞」を受賞しました。

その後、演奏会が行われ、オーケストラは東京交響楽団と昭和音大・洗足音大の学生と、市民からの公募で約120人。合唱は公募でなんと約400人。指揮は秋山和慶先生、ピアノは小川典子さんという豪華な顔ぶれ。演奏の時、弦楽器は2人で1本の譜面台を使い、舞台内側の方が譜めくりをするのですが、東京交響楽団の団員＝プロの方に譜めくりをしてもらい、とても貴重な体験をしました。

客席もほぼ埋まり、盛大な式典になりました。これからも「音楽のまちかわさき」を盛り上げていければと思っています。

（横須賀 朝子）

川崎市市制100周年記念オーケストラ・合唱団

〈追悼〉菅野明さんに感謝を込めて

私と同じ山形県出身の菅野明さんが、川崎市の教員となって初めて赴任したのは柿生小学校でした。当時、柿生小学校には黒川分校と岡上分校があり、菅野さんは岡上分校に配属され、学校の宿直室に寝泊まりしながら子どもたちに教えていたそうです。岡上分校は4年生までの複式学級で、40人の子どもたちが在籍していました。その後、黒川分校に転任され、3年生10人の担任に。川崎といえば林立する工場の煙突から出る黒い煙のイメージを持っていましたが、分校は自然豊かな環境の中にあり、伸び伸びとした元気な子どもたちに囲まれて楽しかったといいます。このように始まった教員生活の後、市内の複数の学校で校長を務め、厚い信頼を寄せられていました。

退職後、麻生区文化協会に入会され、平成18年・19年度には副会長として橋本周さんと共に京会長を助け、文化協会を盛り上げてくださいました。「民藝の女優さんを描くデッサン会」や「夏休み親子教室」「俳句大会」「七草粥の会」等々、多くの事業を進めてくださいました。また、アルテリッカ美術展や文化祭、かわさき市民芸術祭の展覧会などには毎年、優しさにあふれ心動かされる絵画作品を出品してくださいました。

そんな中、川崎市の「文化会議」と7区の文化協会が構成する「川崎市総合文化団体連絡会」の刊行物『文化かわさき』で、39号から42号まで編集長を務め、すばらしい特集を組まれました。

○39号「特集・150万人都市かわさき」（平成30年2月発行）

○40号「特集・川崎文化の平成時代を見る」（平成31年2月発行）

○41号「特集・平和を令和に継ぐ」（令和2年2月発行）

○42号「特集・コロナ禍の記録・記憶として」（令和3年2月発行）

どの特集も時代を読み込んだテーマで、書き手の方々も各方面より選出され、読み応えのある川崎の歴史を書き残してくださいました。また、表紙の絵も描いてくださいました。

近年も柿生小学校で初めて送り出した卒業生たちと交流を続けていた菅野さん。教え子たちに「先生」と呼ばれる時が一番幸せとおっしゃっていました。亡くなられる3カ月ほど前に、先生を慕う教え子たちに囲まれて、幸せなひとときを過ごされたと伺いました。

ここに麻生区文化協会の活動・発展に力を尽くしてくださったことに心より感謝し、一文を表しました。

（菅原 敬子）

文化協会のこれから

麻生区文化祭

※詳細は総合パンフレット参照

◆邦舞邦楽
10月19日(土)13時開演 ホール

◆俳句大会
10月19日(土) 13時開始 大会議室

◆麻生フィルハーモニー管弦楽団
10月20日(日) 14時半開演 ホール

◆美術工芸展
11月1日(金)～6日(水)
個人展示 市民ギャラリー
団体展示 ウォールギャラリー
「夏休み親子教室」における小学生の書

◆吟舞吟詠
11月3日(日) 13時開演 大会議室

◆洋舞
11月3日(日) 16時半開演 ホール

《2025年》

あさお古風七草粥の会
1月7日(火) 麻生区役所前広場

アルテリッカ新ゆり美術展
3月3日(月)～9日(日) 10時～18時
新百合21ホール

40周年記念 文化講演会
3月15日(土) 14時 大会議室

《訃報》

謹んでご冥福をお祈りします

森 一二（2023年12月）

菅野 明（2024年4月）

編集後記

今夏は昨年にもまして異常な暑さ、会員の皆様の健康を案じております。

さて、今年は大きな節目の年。オリンピックがパリで開催され、日本のメダルラッシュにわきました。また、岸田総理の退任意向が発表され政治も流動的です。身近では川崎市制100周年、当会も創立40周年の年であります。4月からは役員も大幅に交代しました。板橋新会長を中心に活動が始動し、新たな風が大いに期待されます。恒例の夏休み親子教室は関係者の皆様のご協力により無事終了。今後は更に子どもたちが多様な学習・経験を通じ文化を継承し、新たな文化を創出するような取り組みが課題です。

（橋本 周）

【編集委員】
井上 俊夫、小田島 寛、木村 幾子、佐藤 勝昭、関森 田鶴子、橋本 周、横須賀 朝子

麻生区文化協会会報
からむし 第75号
2024（令和6）年9月30日発行
発行人／麻生区文化協会
会長 板橋 洋一
編 集／麻生区文化協会広報部
川崎市麻生区万福寺1～5～2
麻生文化センター内
☎044・951・1300
印 刷／㈱エリアブレイン